

## 第 12 回 発 表 集 会 印 象 記

高岡市保健センター 熊谷 武夫

第12回富山県農村医学研究および健康管理活動発表集会は去る1月28日13時35分から、厚生連高岡病院地域医療研修室（I）を会場として開催されました。

今回は1月17日に発生した兵庫県南部地震の被災地の惨状が刻々と伝わっている中での集会で、当日の朝には富山県の医療救護班の第二陣として、高岡市民病院と高岡市の職員が、神戸市の救護センターへ出発して行きました。

越山会長の開会の挨拶にはじまり、先ず渡辺正男先生が座長をされて会員発表が始まりました。

13時42分から第1席の厚生連高岡病院・西井智恵美さんが「在宅医療への阻害因子をさぐる」と題して、平成5年1月から1年5カ月間に、65才以上の脳血管障害で入院加療した45例についてアンケートを実施された結果を話されました。

病状が良くなってもなかなか退院出来ない患者さんについては、いわゆる「社会的入院患者」といわれていますが、演者はこのような患者を退院に導くためには、患者に対しては日常生活への適応を助け、家族に対しては具体的な家族における介護方法の指導が必要であると結論されました。

渡辺先生は「さらに症例を増やして検討して欲しい」と助言されました。

第2席は高岡市農協婦人部の「萌ぎの会」の畑 泰子さんが、ボランティア組織「萌ぎの会」の活動について発表されました。

農協では高齢者の在宅介護を組合員自らの手で出来るように、ヘルパーの養成を図り高岡でも農協婦人部員の中で、ヘルパー資格を取られた方がかなりの数に達しているそうです。

「高岡萌ぎの会」にはそのうちの17名が参加されて、現在は週1回、厚生連高岡病院で3級ヘルパーの資格の方は外来で、2級の有資格者は病棟で、看護婦の補助者としてボランティア活動をされている様子をお話になりました。

越山先生は「ボランティア活動を続ける上にはそれぞれの家族の理解が必要であろう」と発言され、渡辺先生は「無理をせずに長くつづけて欲しい」と助言されました。

14時10分からは豊田 務先生が座長をされて越山先生の特別発言と2題の会員発表が続きました。

会長の越山先生は「富山県農村医学研究会の展望と期待」と題して特別発言なさいました。

先生は冒頭に、医師になられてから50年を経過されて、その間のご自身の経験も踏まえて、戦中・戦後の貧しい時代から経済大国といわれる現在の富裕な社会に変貌する中で、疾病も結核・伝染病から、糖尿病をはじめとする成人病にとって代わられたことを指摘されました。

腰痛症などの肉体的な農夫症を「第一農夫症」とすれば、精神の不健康によって生ずる「第二農夫症」が問題になってきたこと、家

も村も学校も様変わりする中で、機械に使われる人間が増えて、現在では精神の不健康が大問題であると話されました。

老人ケアの取り組みについては、如何に豊かで健やかな老後を確保していくかが問題であり、老年医学は35年前に故村上元孝教授によって提唱されたが、「老い」は老年病ではなく、「老い」そのものに関する研究が必要で、これについては近くアンケート調査にかかるが、中国との共同での調査・研究も手がけて行きたいと言われました。

さらに先生は現在の病院では検査・投薬が大きな比重を占めていて、医師と患者が触れ合う時間もないので今後は、患者に安心を与える医療への改革が必要であるとも述べられました。

第3席では富山医科薬科大学公衆衛生学教室の寺西秀豊先生が「富山県の空中花粉調査(1994)の特徴と地域差について」発表されました。

先生は県内で空中花粉の定点観測を続けておられますが、これが8年目の調査であって、昨年はスギ・ヒノキともに花粉の飛散が少なかったことを報告されました。

座長の豊田先生は「3～4月の花粉症の患者数が前年8月の気象と相関すること、また今年のスギの花粉の飛散がかなり多いと予想される」と発言なさいました。

第4席では福野町農協の高橋真由美さんが、「母と子の嗜好とアレルギーの関係について」発表されました。

福野町の保育所の年長児の135人、福野小の児童964人とその母親について、15食品群の嗜好について、各々「好き」「嫌い」の2群に分けて、各グループ毎にアレルギー患児の比率を比較されました。

結果は年齢に関わらず母と子の嗜好には共通性があったとされましたが、アレルギーとの関連性はいまひとつはっきりしないようでした。

寺西先生は和食では嗜好とアレルギーとの間に相関がありそうだと指摘されましたが、もともとアレルギー反応は、ひとりひとりに特異的なものですので、さらにより細かな検討が必要であろうと思われます。

15時09分からは熊谷が座長を勤め、検診に関わる演題が発表されました。

第5席の岸宏栄さんは「人間ドックにおけるBody Mass Index (BMI) と健康度の関係について」発表されました。

身長・体重から求められるBMIは、体重(kg)を身長(m)の二乗で除して表されますが、これは従来の標準体重表による肥満度と高い相関を示すそうです。

そして検診成績との関連においては、検診の有所見率は男性ではBMI値20～21を最低に、その低下ならびに上昇とともに増加し、女性ではBMIの上昇につれて有所見率も上がると結論されました。

最も死亡率の低いBMI値は22であるという報告があるそうです。

第6席は高岡検診センターの福田久美子さんで「二次検診の受診率向上の一考察」を発表されました。

日帰り検診の受診者3,186名に対して行なわれた調査では、二次検診(精密検診)を指示された人の約30%が未受診で、男性の未受診者が多かったとのことでした。

しかし一般に生命に直接関わると考えられている循環器や癌の検診については精検受診率が高かったことから、その他の検診項目についても二次検診の必要性を更に啓発普及することが重要であると結論されました。

調査書を受け取ってからはじめて二次検診を受診した人も多く、この種の調査は受診者の二次検診への関心を高める上にも有効であったと話されました。

小川先生は討論で「精密検診結果を記録して、受診者の次年度の検診にそれを活かすと同時に、日帰り検診そのものの精度管理にも

活用すべきである」と発言されました。

厚生連の大浦さんは、福光町では農協と町が受診費用の助成を行なうと同時に、精検未受診者にペナルティーを課すことによって、その受診率は100%になっていると追加されました。

第7席は厚生連滑川病院、小川忠邦先生の「胃癌検診の現状と問題点」でした。

昭和55年から平成5年までの14年間に、滑川検診センターで発見された胃癌患者は165名で、男106名、女59名で、これは全受診者の0.39%にあたりと報告されました。

初回受診者は86名、再受診者66名であり、3年以内の再受診者についても進行癌の比率は32.2%であって、逐年受診者（毎年受けている人）でも進行癌で発見される例が少なくないということです。

過去3年以内の再受診者について「異常なし」としたフィルムを再検討して、そのフィルムに何らかの異常が指摘された例が92例中37例もあったといいます。

癌検診の目的は救命可能な癌を効率よく発見することであるが、現行の検診方式では診断の精度に限界があるので、今後は対象者の年齢、有所見者の管理検診、胃内視鏡、ペプ

シノーゲン法などを組み合わせて、個別的な検診体制を作らねばならないと結ばれました。

平成2年以降高岡市の胃癌検診の受診者は徐々に増加して、年間約8,000人の受診者があって、高岡検診センターのバスにも多くの市民がお世話になっていますが、小川先生のご発表を伺って、私は今後も精密検診の受診率向上に努めることはもとより、市民に対して「必ず年に一度は胃癌検診を受診する」ことを徹底しなければならないことを痛感しました。

と同時に一人でも多くの早期胃癌患者を発見すべく、日夜研鑽を積んでおられる検診センターの皆様のご努力に深い感銘を覚えました。

16時11分に越山先生の「熱心な討論に感銘した」とのご挨拶があり、集会は終わりました。

今回も昨年と同様に雪の降る足場の悪い中での集会でしたが、多くの出席者があって盛会のうちに終わりました。

本集会が今後ますます発展されますことをお祈りしまして稿を終わります。

第12回集会をお世話下さいました厚生連の大浦さんをはじめ事務局の御苦勞に深謝します。